

巻頭言

21世紀を迎えてから早くも5分の1世紀が経とうとし、改元して令和の時代を迎えてから半年以上が過ぎました。この間、本邦における製薬医学に関する環境は目まぐるしく変化し続けてきました。一昔前には数少なかった国際共同治験は、今ではデフォルトとして当たり前のように施行され、現在では如何に計画段階で日本のニーズや日本の施設、症例数をその中に確保するかということが問題となっており、また、少し前まで、日本で独自のルールで行われていた臨床研究が国際的な基準で施行される準備が整いつつあります。本邦では、一部の外資系製薬会社にしか存在しなかったメディカルアフェアーズ、メディカルサイエンスリエゾンが、今では多くの内資系製薬会社も所持するようになり、それらの重要性や知名度も飛躍的に向上してきています。更には、ビッグデータ、プレジジョンメディスンに代表されるテクノロジー等の発展により、製薬医学に関しては、ますます国境や専門分野の壁を乗り越えて理解、応用する必要性が増しています。このような状況で、2018年に東京で我が国で初めて国際製薬医学大会（International Conference in Pharmaceutical Medicine：ICPM）が開催されたことは、非常に意義深いことと考えます。

製薬医学（Pharmaceutical Medicine）は、英国を発祥とした製薬に関する医学領域の一つの学問体系で、創薬、translational research、臨床試験から承認後の安全性の問題までを包含し、基礎・臨床医学から、製薬企業などの医療産業、医薬行政に係る学際的分野です。一般財団法人日本製薬医学会（The Japanese Association of Pharmaceutical Medicine：JAPhMed）は、国際製薬医学会（International Federation of Associations of Pharmaceutical Physicians and Pharmaceutical Medicine：IFAPP）の一つのメンバーとして、医薬品開発、メディカルアフェアーズ、市販後管理や臨床研究等に従事する産官学のメンバーを中心とした、その前身を含めると創立以来50年以上の歴史を有する団体です。これまでも年次大会を開催し、製薬企業、アカデミア、規制当局および医療機関の第一線で活躍している当学会のメンバーおよび各分野の専門家が参集し、臨床開発、臨床研究、安全性、製薬医学教育、メディカルアフェアーズ等に関して活発な議論を行って参りました。2018年に開催された第19回国際製薬医学大会は、第9回日本製薬医学会年次大会と併催という形で、今村恭子、西馬信一両大会長のもとで開催され、世界各国より各分野の専門家を招集して、“The Future of Medicines Development”というテーマに沿って、活発な議論が行われ盛会のうちに終了しました。本特集号には、当日の講演記録、終了後にまとめた結果概要、2020年のローマ大会の展望も含めたオーバービュー、その他関連論文・記事等を掲載し、オリジナルの英語版も同時掲載するとともに英語版はWeb公表し国際的に共有し次の展開につなげたいと考えています。

本特集により、開催時、そして今後の展開に向けた興奮、感動までも感じ取って頂けるのなら望外の喜びです。

岩本 和也
一般財団法人日本製薬医学会 代表理事